

第 74 回美術史学会全国大会シンポジウム概要

【テーマ】

修理と美術史学 残すもの、除くもの、補うもの

【開催趣旨】

美術作品における修理とは、ごく端的に言えば、「伝来の過程で後世に付加されたものを除き、オリジナル部分が有する本来の造形の力を回復し、除いた箇所には、オリジナルの力を妨げない処置を行う」ということになるでしょう。ではそれは何を残すために行われるのでしょうか？

世の一般的な修理の多くは、その「機能」を残すために行われます。例えば、パソコンの修理においては、それによって従前と同じ機能を回復することが求められます。そして、パソコンの場合は、そこにあるべきデータ＝「記憶」の復元も期待されます。では、美術にとっての修理とは？

信仰の対象となる美術には、礼拝像としての機能の回復が求められるでしょう。人々の信仰心を掻き立てる崇高さ、美しさ、堂内に安置できるような形の回復。そのために残すべきものが定まります。この残すべきものを見極めることは、美術史家の重要な仕事でしょう。そして、残すべきものが定まった時に、そこから除くべきものが見極められ、さらに除いたものを補う方法を考える必要が出てきます。一方で、補う方法が固定化している時、逆にその方法によって残すべきものが定まる場合もあります。

例えば、現在の日本絵画の修理で行われる「地色補彩」。この方法では、本来そこにあるべき形が失われたそのキャンバスの色（地色）を想定して色が補われます（補彩）。そこでは失われた形を補うことはありません。例えば、肖像画で目が失われている時、そこに目を描くことはしません。そして、その理由は、失われた目がどのように描かれていたかは誰にもわからないから、と説明されます。であれば、後世に付加された目を除くべきなのか、残すべきなのか、ここでは補う方法が何を残すかを決定します。目のない肖像画があるべきか否か。

さらに、いま例にあげた「目」のように、後の時代に加えられた修理とは、作品にとっての「記憶」なののでしょうか？後補箇所を残すことは、作品をめぐる記憶を残すことになるのでしょうか？

近年、アメリカを中心に、日本における修理技術に注目が集まっています。また、修理を支える様々な判断、これを「修理の哲学」と仮称しましょう。これへも関心が寄せられています。しかし、そもそも「修理の哲学」とはどのようなものなのでしょうか？それは洋の東西によって異なるものなのでしょうか？それとも絵画や彫刻といった対象によって異なるものなのでしょうか？

このシンポジウムでは、このような観点から修理と美術史学がどのように関わるべきな

のか、美術史学が修理の哲学形成にどのように寄与できるのか、を考えてみたいと思います。

【日時】

2021年5月15日（土）14：00～17：30

【会場】

神戸大学百年記念館六甲ホール（オンラインで同時配信）

【プログラム】

1、主催者あいさつ：宮下規久朗（神戸大学）

2、趣旨説明：増記隆介（東京大学）（15分）

3、報告：（各25分）

3-1 日本の例

絵画 朝賀 浩（宮内庁）

彫刻 奥 健夫（文化庁）

3-2 西洋の例

絵画 田口かおり（東海大学）

彫刻 芳賀京子（東京大学）

4、休憩（20分）

5、総合討議：（70分）「修理と美術史学」

パネリスト

朝賀 浩

奥 健夫

田口かおり

芳賀京子

岡岩太郎（岡墨光堂）

司会 増記・筒井忠仁（京都大学）